

今週の為替相場見通し(2024年7月16日)

総括表		注	先週の値動き		今週の予想レンジ
			レンジ	終値	
米ドル	(円)		157.30 ~ 161.81	157.60	156.00 ~ 161.00
ユーロ	(ドル)		1.0792 ~ 1.0911	1.0910	1.0850 ~ 1.1000
(1ユーロ=)	(円)		171.44 ~ 175.42	172.15	171.50 ~ 174.00
英ポンド	(ドル)		1.2778 ~ 1.2990	1.2990	1.2800 ~ 1.3000
(1英ポンド=)	(円)	*	203.86 ~ 208.11	205.07	203.00 ~ 207.00
豪ドル	(ドル)		0.6724 ~ 0.6798	0.6784	0.6650 ~ 0.6840
(1豪ドル=)	(円)	*	106.76 ~ 109.37	107.12	105.50 ~ 109.50

(データ)先週の値動きに関して、注の欄で無印の項目はみずほ銀行、*印の項目はブルームバーグ。

1. 米ドル

金融市場部 為替デリバティブチーム 大野 梨紗

(1)今週の予想レンジ: 156.00 ~ 161.00 円

(2)ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

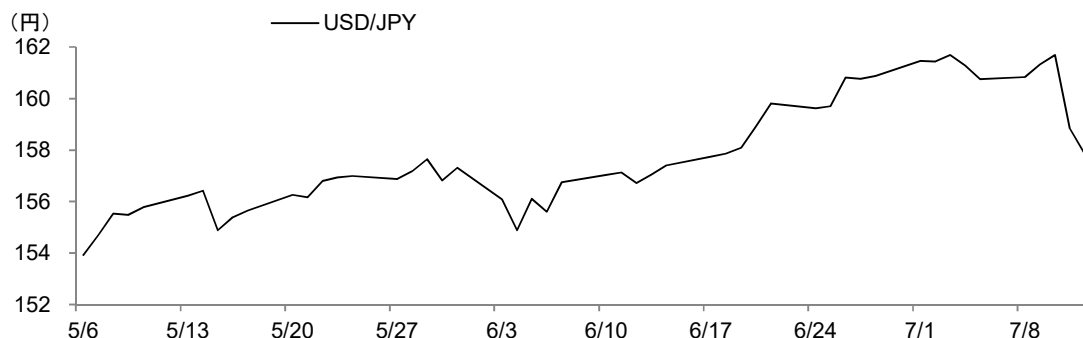
先週のドル/円は大幅に下落する展開。週初8日、160.64円でオープンしたドル/円は、ドル売り地合いが継続。海外時間も160円台後半を中心に方向感なく推移した。9日、ドル/円は日本株の堅調推移を横目に161円台前半にじり高。海外時間は、パウエルFRB議長の議会証言においてハト派的な発言もあったが、具体的な利下げ時期は示されなかったことで米金利が上昇、161円台半ばに続伸。10日、ドル/円は161円台半ばでもみ合い推移。海外時間は、米株の堅調推移につられ、一時週高値の161.81円まで上伸した。11日、ドル/円は161円台半ばでのレンジ推移。海外時間は、米6月消費者物価指数(CPI)の結果が予想を下回り、FRBによる早期利下げ観測が再燃。米金利低下と共にドル/円は157.40円に急落した。12日、ドル/円は「日銀が対ユーロでレートチェック」との報道に、一時158円を割り込んで急落した。その後も158円台を中心に粗い値動きとなる中、海外時間には前日に続き再び政府・日銀による円買い介入と見られる値動きに一時週安値となる157.30円をつけ、157.60円で越週した。

今週のドル/円はじり高推移を予想。先週11日に発表された米6月CPIの市場予想を下回る結果を受け、FRBが9月にも利下げへ踏み切る公算が高まった。一方、本邦1~3月期GDPは▲2.9%(前期比年率)となり2四半期ぶりのマイナス成長となったことで、日銀金融緩和の長期化懸念が依然燦々している。こうした中、11日、12日において政府日銀による円買い介入措置と思しき対応が連日取られたことでドル/円は急落する場面もあったが、結果的に157円台までの下落に留まっており、ドル/円の下値が限定的であることが窺える。また、トランプ前大統領銃撃事件を受け、秋の大統領選で同氏が勝利するとの見方がより優勢となったことも、ドル高を支える要因となろう。このような状況下、今週は16日(火)に米6月小売売上高、17日(水)米6月住宅着工件数等の発表が予定されており、これらの指標結果が市場予想を大幅に下回った場合にはリセッション懸念からドル売りに反応しやすいと考えられるものの、一定の日米金利差は根底にあることから、ドル買い圧力は根強く、ドル/円はじり高に推移するものとみる。また、本邦では19日(金)に6月CPIの発表が予定されており、この結果は日銀の今後の金融政策方針を占う材料となるため注目したい。

(3)先週までの相場の推移

先週(7/8~7/12)の値動き:

安値 157.30 円 高値 161.81 円 終値 157.60 円



(資料)ブルームバーグ

2. ユーロ

金融市場部 為替営業第二チーム 伊藤 基

(1) 今週の予想レンジ: 1.0850 ~ 1.1000 171.50 ~ 174.00 円

(2) ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週のユーロ/ドルは、週後半にかけて堅調に推移し、1.09台まで上昇した。週初は、前週末に行なわれた仏国民議会選挙にて、左派連合が勝利したことに加えて、議会での絶対多数派がいないことから、政治的な不透明感が強くなるとの懸念が広がる中、週間での安値となる1.08ちょうど付近まで下落した。一方、週央にかけては欧州の株式市場が持ち直しの動きを見せたことに加えて、10日に公表された伊5月鉱工業生産が堅調な結果になったことなどを受け、ユーロ相場は底堅い推移となった。11日に公表された米6月消費者物価指数(CPI)が市場予想を下回る結果になると、物価上昇圧力が着実に鈍化しているとの見方が市場で広がり、FRBの利下げ期待が加速するなか、ユーロはドルに対して上昇する場面が見られた。ただ、その後に米金利が低下幅を縮めたこともあり、とユーロ買いの流れは長くは続かなかった。週末に公表された米6月生産者物価指数(PPI)は、市場予想を上回る結果となったが、内容を見ると、前日に公表された米CPIと同様に物価上昇圧力が鈍化している様子が伺えたことから、米金利が低下する中で、ユーロ買いが再び優勢な展開となり、1.09台まで値を伸ばす展開となる中、週末を迎えた。

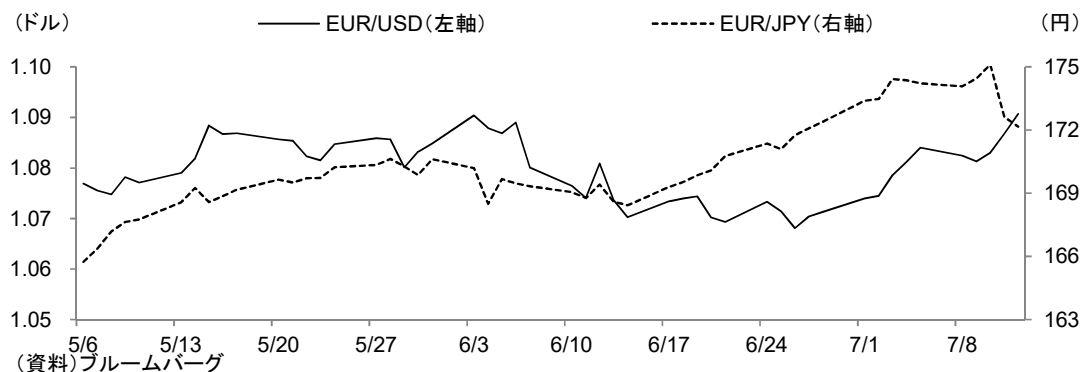
今週のユーロ/ドルは、堅調な推移を予想する。今週は18日(木)のECB政策理事会が最も注目されるイベントになる。事前の予想では、今回の理事会では追加利下げが見送られる公算が高まっているが、9月以降の利下げパスについての見解などについては声明文や理事会後の記者会見から何らかのヒントが得られる可能性がある。欧州だけでなく、米国経済に対する先行き不透明感がある中では、9月利下げについて決め打ちするような姿勢を見せることは賢明とは言えないだけに、先々の追加利下げに前向きな見方を示す一方で、時期については明言しないスタンスを示すであろう。米国に目を向けると、先週公表された米CPIが弱かっただけに、先々の利下げが強く意識される展開が続くとみている。そうした中では、ドルが売られやすい展開となり、ユーロは一段と上昇する可能性が高いとみている。注目材料として18日(木)のECB政策理事会以外では、16日(火)ユーロ圏5月貿易収支、独7月ZEW景気期待指数、17日(水)ユーロ圏6月消費者物価指数(HICP、確報)、19日(金)独6月PPIなどが挙げられる。

(3) 先週末までの相場の推移

先週(7/8~7/12)の値動き:

(対ドル) 安値 1.0792 高値 1.0911 終値 1.0910

(対円) 安値 171.44 高値 175.42 終値 172.15



3. 英ポンド

欧州資金部 中島 将行

(1) 今週の予想レンジ: 1.2800 ~ 1.3000 203.00 ~ 207.00 円

(2) ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週の英ポンドは、対ドルで大幅に上昇した。11日公表の米6月消費者物価指数(CPI)が前月比▲0.1%と市場予想(同+0.1%)を大幅に下回る結果となったことを受けて、グローバルにドルが下落した。また、BOEの8月会合での利下げ開始という見方がやや市場で後退したことも影響している。BOEのビル・チーフエコノミストは10日、利下げはするかどうかも時期が問題、と次の行動が利下げであるという認識を示すと同時に、高インフレが持続するリスクに対する警戒姿勢を強調した。また、翌11日に発表された英国5月GDPは前月比+0.4%と市場予想の+0.2%を上回った。英国は5月としては観測史上最も気温が高くなり、6月21日発表の小売売上高も堅調な結果となっていた。英経済が再び成長軌道に乗ったことは、BOEにとっては利下げを急がなくても良いという判断につながる可能性がある。政治情勢では8日にレイチェル・リース新財務相が就任後初の長期会見を行っている。5年間で150万戸の住宅を建設するという目標に改めて言及。都市計画を見直し、規制緩和に取り組むとしている。また、官僚主義を排除し、保守党政権下で事実上、禁止されてきた陸上風力発電の建設を推進する方針も示している。なお、ポンド/円相場は下落。11日から12日にかけて、日本当局の介入が疑われる動きがあり、ドル/円に加えてクロス円も下落した。

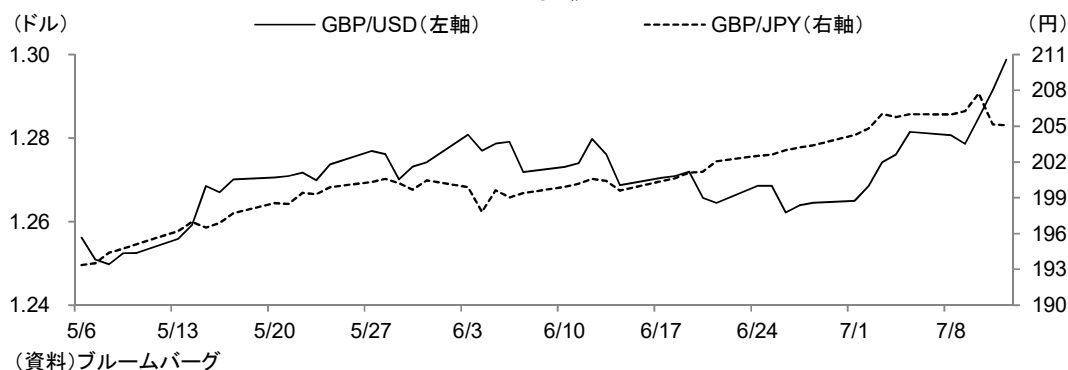
今週のポンドは、やや上値の重い展開となりそうだ。週末のトランプ前大統領の襲撃事件は、結果的にトランプ氏にとってさらなる追い風になるという見方がある。同氏が掲げる保護主義政策や減税策は、インフレ加速・ドル高につながる可能性が大きい。英国では、17日(水)の6月CPIや18日(木)の労働市場関連統計が注目される。8月1日(木)のBOE会合での利下げの是非を占ううえで、サービス価格の動向が焦点となる。ユーロ圏では18日(木)にECB政策理事会を控える。今会合では追加利下げ見送り、9月会合での追加利下げとなる可能性が大きい。フランスで燦る政治不安への対処をはじめ市場の安定に向けたECBの姿勢が焦点となる。

(3) 先週までの相場の推移

先週(7/8~7/12)の値動き:

(対ドル) 安値 1.2778 高値 1.2990 終値 1.2990

(対円) 安値 203.86 高値 208.11 終値 205.07



4. 豪ドル

アジア・オセアニア資金部 シドニー室 川口 志保

(1) 今週の予想レンジ: 0.6650 ~ 0.6840 105.50 ~ 109.50 円

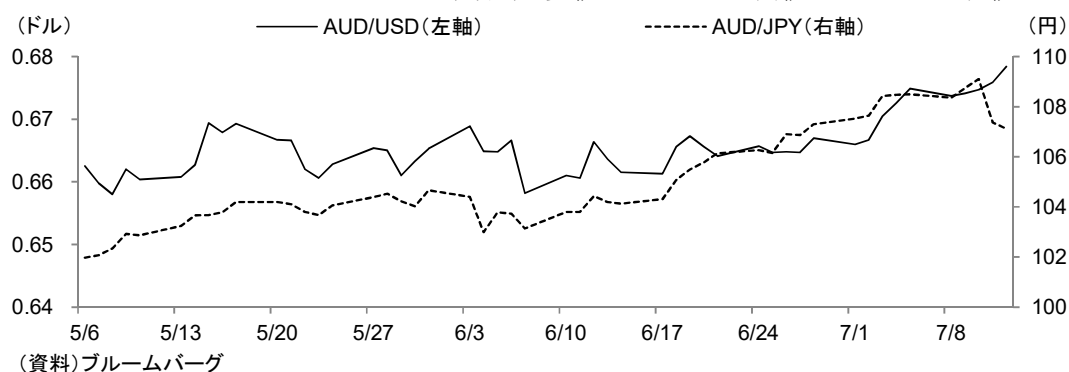
(2) ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週の豪ドルは上昇した。月曜は特段のヘッドラインは見られなかったものの、前週の米6月雇用統計の結果を消化しながら、概ね0.67台前半での推移となった。NY時間はS&P500が最高値を更新し、豪ドルが支えられた。火曜、水曜は米6月消費者物価指数(CPI)を木曜に控えて方向感に欠く展開となり、0.6724~52のナローレンジで振幅。豪ドルへの影響は限定的であったが、中国6月消費者物価指数は前年比+0.2%となり、ベース効果が期待されていたにもかかわらず前回は、予想を共に下回った。同生産者物価指数も前年比▲0.8%となり、いずれも中国の内需の弱さと企業利益圧迫が示唆される結果となった。NZ中銀は5月の会合では利上げの可能性も示唆していたが、今回の会合では政策金利を据え置きし、将来的な金融緩和の可能性を示唆した事でNZドルが売りとなり、AUD/NZDは1.0990付近から1.11付近まで上昇。この他、週央はS&P500が再び過去最高値を更新し史上初の5600台に到達。木曜は米6月CPIが前月比で▲0.1% (前年比+3.0%) となりインフレ鈍化の兆候が示され、一部で9月利下げ観測が高まり、ドル売りを背景に豪ドルが0.68手前まで上昇した。但し豪ドルはこれまでレンジでの取引が続いていた為、豪ドルの利食いが相次ぎ、NY引けにかけて0.67半ばまで戻した。ドル/円はこの間161.60円付近から一時157.40円へ下落し円高方向に動いた。豪ドル/円は109.20円付近から一時107円ちょうどまでの下げを記録した。金曜は前日の米CPI鈍化を受けたドル売り調整フローを背景に0.6760付近から0.6793まで上昇。ドル/円は日銀による「レートチェック」が行われたとの憶測が燃る中、159円台前半から157円台前半で上下を繰り返した。豪ドル/円は107円後半から106円台後半での振幅。米7月ミシガン大学消費者マインド(速報)は軟調であったものの、米6月生産者物価指数(PPI)は予想を上回る伸びとなり、指標の強弱はまちまちとなった。豪ドルは0.67台後半で越週。

今週は15日(月)中国4~6月期GDP、中国6月鉱工業生産、中国6月小売売上高、16日(火)米6月小売売上高、17日(水)NZ4~6月期消費者物価指数、ユーロ圏6月消費者物価指数(HICP、確報)、英6月CPI、米ページブック、18日(木)豪6月雇用統計等、ECB政策理事会が発表予定。週末にトランプ前大統領が耳を撃たれる事件があったが、この事件を受けて安全資産への逃避買いが集まるようなリスクオフの動きを予想する向きがある。そうなれば、豪ドルはやや上値を押さえられる可能性がある。豪雇用統計は直近5月に正規雇用者数が予想以上に増加し、失業率が低下。Per-capitaではリセッションに陥りながらも、労働市場が依然として底堅いことが確認された。今週の豪6月雇用統計で引き続き労働市場が堅調な証拠が挙げられれば、短期的な利上げを期待する動きが更に織り込まれる為、豪ドルが支えられる可能性が高い。現在市場ではRBAによる年内利上げを織り込む動きが一部あるものの、来年8月までで見れば1回(▲25bp)の利下げがフルで織り込まれている。

(3) 先週末までの相場の推移

先週(7/8~7/12)の値動き: (対ドル) 安値 0.6724 高値 0.6798 終値 0.6784
(対円) 安値 106.76 高値 109.37 終値 107.12



当資料は情報提供のみを目的として作成したものであり、特定の取引の勧誘を目的としたものではありません。当資料は信頼できると判断した情報に基づいて作成されていますが、その正確性、確実性を保証するものではありません。ここに記載された内容は事前連絡なしに変更されることもあります。投資に関する最終決定は、お客様ご自身の判断でなさるようお願い申し上げます。また、当資料の著作権はみずほ銀行に属し、その目的を問わず無断で引用または複製することを禁じます。なお、当行は本情報を無償でのみ提供しております。当行からの無償の情報提供を望まれない場合、配信停止を希望する旨をお申し出ください。